

飛鳥

2018年
初冬号
第197号

かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所
飛鳥出版室
発行人 永野 正将
〒780-0945 高知市本宮町65-6
電話 088-850-0588
e-mail: info@asuka-net.jp
http://www.asuka-net.jp



至福のひととき



秋たけなわの11月10日・11日、かるぽーとでの秋季いけばな県展のひとこま。

会場いっぱいに活けられた花々のみごとなこと。豪華な花、可憐な花、凛とした佇まいの花に、至福のひとときを楽しみました。

老いについて	田村雅一	2
キルギスタンからコンニチハ ㊦	氏原名美	4
新聞余話⑧	大澤重人	5
おのころじま奮染記 15	田島征彦	6
いろいろかいろ ㊦	安藝真一	7
報告		8
わが家の太郎 ㊦	永野雅子	10

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

老いについて

田村雅一

人間を含む全ての動物には、寿命というものが与えられている。人間は、もし天寿をまっとうすることが出来る運命が与えられるならば、かならず老年期という時期を通過しなければならない。

ところが多くの人々は、老いることを嫌い、出来れば若いままでとどまっていたいと願うようである。中には若くみせたい為に、むやみに化粧をしたり、美容手術をしたりする人もいる。また少しでも長く若さを保つために、無理な運動をしたり、若いことを強調するため、無理な登山をして命を落とす人もいるらしい。

しかしほくとしては、人生を肯定的に考える人ならば、人生のプロセスの全てを肯定的に考えるべきであると思っ



新刊紹介



『遺言の代わりに』
B6判/252頁/並製本
定価：1000円(926円+税)

死について (本文より)

最近、遺伝子の研究も進み、癌と関係している遺伝子も発見されたという。恐らく近い将来、統合失調症や躁うつ病を発症させる遺伝子も見られるであろうと思われる。

ほくは、加齢現象、即ち誕生、幼少期、青年期やがて中年、高齢期へと向かう全ての人間がほぼ同じ速度で発達し、そして衰え、死を迎える過程こそ、まさしく遺伝子により、決定されていると信じている。これらの遺伝子も、発見されるのは、時間の問題である。それらが発見されれば、その作用を止める方法も、それほどときをおかずして発明されるであろう。そうすると、人間の発育を、ある一定段階で止めてしまうことが出来るようになる。

多くの、おそらくほとんど全ての人間は、老人になり衰えることを嫌っているから、若いままにとどまりたいと願うかもしれない。果たしてそれは、人類にとって本当に喜ばしいことで

ている。

現在ぼくは七十九歳になり、歩行も不安定で二百メートル以上は歩くのが困難になり、胃ろうを作っているので、口から飲み食いすることは一切出来なくなっている。

従ってスポーツはもちろん、好きだった旅行や、かつて人生の楽しみの中心だった友人たちと一緒に食事しながら、酒を飲みかわすということも、全く出来なくなってしまった。

それにもかかわらず、いまが人生で一番楽しい瞬間ではないか、と感じながら、毎日を生きている。

ぼくはまだ、テレビを見ることが出来る。それによって、好きな相撲や歌謡曲を十分に楽しむことが出来る。また、友人たちと会って、会話を楽しむことも出来る。

老人はすでに失ったものや、出来なくなったことを、いつまでも追いつめて嘆き悲しんだりするのをやめれば、本来に重篤な病いにおかされてほとんど全ての重要な機能を失い苦しんでいる人を除いて、十分に残りの人生を有意義に、楽しく生きることが出来るのである。

イラスト・千光士可苗

あろうか。

死を決定する遺伝子そのものが、存在するかどうかについてはぼくは確信がない。あるいは、直接死をもたらす遺伝子はなくて、生命の維持に役立っている他の遺伝子が、一定の時間が経つとその作用が衰え、その結果死に至るようになっていくのかもしれない。

いずれにせよ人間が自分の力で加齢や死を止めるような時代がくると、一体人類はどのような混乱に陥るのか、想像を絶する恐ろしさがある。

ぼく自身は、そのような時代が来る前に成長し、老年期を迎え死んでゆけることを大いに安心している。

不老不死を願う人は多いだろうが、もしそれが現実のものとなると、恐らくとてもない災いがもたらされるであろうとぼくは信じている。神は全ての生物、特に動物には寿命というものを与えている。

種によって長短の差があるが、同一種には、ほぼ一定の寿命、即ちほぼ同じ速度で成長し、同じような時期に死んでゆくような生命が与えられている。

その理由はもちろんぼくには分からない。しかしそこにはきっと深い訳があるんだろうとぼくは思っている。

タムラ・マサカズ

岡山県生まれ

近森病院精神科に科長として着任。

精神科独立後、近森病院第二分院の院長に就任。



キルギスタンからコンニチハ ㊦

マナスとアイトマートフの国

氏原名美

うじはら・なみ

越知町出身。北海道大学卒。キルギス国立ビシケク人文大学教授。「キルギスタン」はキルギス共和国の通称の一つ。

キルギスの首都ビシケクの国際空港はマナス空港という。空港コードはビシケクの旧称フルンゼを表すFURだ。マナスはキルギス英雄叙事詩の主人公、フルンゼは赤軍の司令官の名である。日本語は名字の大半が土地の名からきている。地名が人名になることがあってもその逆の習慣はない。だから、初めて高知龍馬空港

と聞いた時は違和感を覚えたものだ。

しかし、日本語と違ってヨーロッパの言語では、土地や建物や施設によく人の名をつける。シャル・ド・ゴール空港やケネディ空港は言うまでもなく、ワシントン市もあれば州もある。レニングラードはレーニンの街、ペテルブルクはピョートル大帝の街、いずれも人名をもとにしている。

ビシケクには、モスクワ通り、キエフ通り、アルマ・アタ通り、ドウシャンベ通りなど、旧ソ連邦同胞共和国の首都名にちなんだ通里もあるが、やはり多いのは人名だ。隣国との関係を反映してか、デン・シャオピン通り、鄧小平の通りというのもある。

トルストイ、ネクラソフ、バッハなど、文学者や音楽家にちなんだ通里もあれば、大学の研究室から見下ろす道路はガガーリン通りで、七年前には大学の壁面に有人宇宙飛行五〇周年を記念してプレートが貼り付けられた。

ソ連邦の都市の名も歴史上の人物や偉人や功労者の名前がついた

道路が縦横に走っていたわけだから、昔は街を散策すればさぞかし地理や歴史の復習ができただろうとか、通りの名が記された建物の標識を指差して「次はこの作家の作品を読んでごらん」と親や教師が子供に勧めることがあったかも知れないと考えると楽しくなる。

独立後、地名の名称変更が進み、通りの名もキルギス式に改まった。レーニンもスターリンも赤軍もプラウダも消えてなくなり、プーシキンやネクラソフは影が薄くなった。新しい名前は全部キルギスの偉人、科学者、文学者、芸術家の名だというのが、一体いつ何をした人なのか大学の同僚に聞いても首をかしげるばかりだ。道の名が変わって何年も経つのに、ほとんどの人が今でも旧名の方を好んで使う。タクシーで行き先を告げる時、新しい名は通じない。

しかし、「マナス」は、小学校からキルギス民族統合の象徴として教えらるから知らないものはない。だから名称変更の花形だ。幹線道路のベリンスキーがマナス通りになったし、トルコ系の有名人

大学でさえ「マナス大学」と称している。通りや大学だけではない。キルギス教育科学省のお墨付きの「マナス学」という学問まであって、必修教科になっている。

ところが最近、民族の英雄マナスも色を失う勢いの名が登場した。世界に名高い小説家チンギズ・アイトマートフだ。国立学校、国立劇場、市立図書館、市民公園と、何から何までアイトマートフ記念と称するようになり、生誕九十周年、没後十周年の今年はついに、毎朝毎夕、大統領を乗せた黒塗りの車がパトカーの先導で往復する「ミール大通り」が「アイトマートフ大通り」と名を変えた。

このままキルギス全土が二つの名前に席巻されたら、将来は、歴史や伝説上の人物といえはマナス、文学者はアイトマートフしか浮かばない、という学生だらけになりはしないか。ついつい無用の心配をしてしまう。

了

ビシケク人文大学日本語日本文学講座
<https://japanesephilology-bhu.jindoo.com>

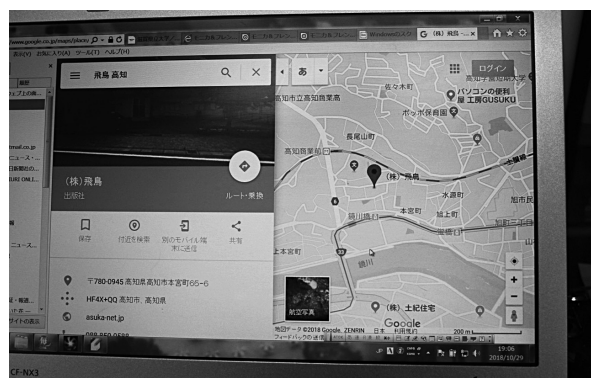
(5) かわら版

「えっ!」。取材当日、相手先の住所を検索して絶句しました。グーグルマップで見つからないのです。新規開発の住宅地は、反映するのにタイムラグがあるようです。

あいにく取材相手は仕事で連絡が付きません。しかも南米出身者で、日本語での会話が心許ないところがあります。ダメ元でひらがな中心のメッセージを送りました。「家の近くに、めじるし、になるような建物(建物の絵文字付き)は、ありますか?」

ふと思いつき、近くの交番に電話してみました。信じられない答えが返ってきました。「巡回で得た情報を教えることはできない。市に聞いてもらえないか」。家族構成や職業など個人情報ならいざしらず、道案内は警察の基本的な仕事ではないのでしょうか。

次に住所を担当する市の部署に電話すると、調べて掛け直してくれるといいます。しばらくして税務関係の職員から電話があり、「書類を申請いただけたら航空写真を提供できます」。そんな悠長なこととは言っておられません。「どのあたりか知りたいだけなのですか」と返すと、元の部署へ。おお



グーグルマップに頼り切りだと痛目に遭います

新聞余話 ⑧

大澤 重人

ネット時代の落とし穴



よその位置がわかりました。どうやら田んぼだったところが住宅地になっているようです。とりあえず現地に行き、探してみよう。早めに出ました。

名神高速を走行中に、仕事の休憩中の取材相手から返信が届きました。「メガネ や あります」。田んぼだったあたりに着くと、メガネ屋の裏に新興住宅地があります。ここかな。40軒ほどの住宅があります。徐行して表札を一軒一軒見て回ります。はずれ、はずれ。表札のない家もあります。昔のように表札に住所を入れている人は皆無です。電柱などの住所表示はありません。ここでもいいのだろうか。

通行人もいません。実は取材相手が帰宅前に、その人の娘さんがインターネットで受講している様子を撮影したいと考えていました。急がないと、受講時間が終わります。周囲を何度も周り、帰宅した住人女性2人をつかまえ、「□△町の8はどの辺ですか」。2人は首を傾げ「ここは1だけど、□△町は広いから」。ここじゃないのか。冷や汗が出ます。

ふと顔を上げると、開発地の地図入りの看板が目に入りました。

一番下に業者の連絡先があります。わらをもつかむ心境で電話します。確かに目的地の開発業者でした。名前と用向きを告げ、ようやく目的地が見つかりました。なんと車を止めた場所のすぐ近くです。目的の家に行き、表札を見ると、違う!! 「U」という名字なのに「O」とあります。

覚悟を決めてピンポンを押します。「Uさんのお宅ですか?」。我ながら意味不明な聞き方です。もう一度押す勇気はありませんでした。再び車に戻り、どうしようか困っていると、車外に人影が見えました。少女がいます。ドアを開けると、「新聞社の人ですか?」。探すこと約40分。受講時間にぎりぎり間に合いました。再婚相手の名前を表札に掲げていたことを後で知ります。

おおざわ・しげと

毎日新聞大津支局兼エリア編集委員。現在は、主に外国籍住民との共生をテーマに取材。高知支局に支局長、次長として計5年半勤務した。著書に『泣くのはあした―従軍看護婦、九五歳の歩跡(第26回高知出版学術賞特別賞受賞 など)。

おのころじま 大奮

ふんせんき

田島征彦

15. 龍馬 見参!!

ギャラリー・パンという、すばらしい現代美術の画廊が追手筋に面したビルの下にあった。ところが30年ほど前にオーナーの事情で画廊を閉じることになった。ぼくは閉じてしまいう前に個展を頼まれた。会期も終りに近づいた頃に龍馬記念館が建つことを、画廊の来客から伝え聞いた。その個展に龍馬をテーマにした絵を出品していて、なかなかの評判だったのだ。「この絵を、新しくできる記念館へ寄贈せんかよ?」

そう言ってくれる人がいて、個展の搬出の日、その人に渡した。

それから、何年も経ったのに、記念館はできた様子もなく、絵を渡した相手の名も忘れてしまった。もちろん信用できる人であったことは



確かなのだが。

それから、また何年か経って、1991年に記念館が完成したと言うニュースは伝わってきた。絵をあげて6年も経っていた。ぼくの絵の寄贈を受けたという書状などは届かないまま、また何年かが過ぎ、2006年に高知県立美術館で、ぼくと征三との二人展が開かれた。その時、龍馬連という、よさこい鳴子踊りの旗を制作することになり、関係者とお会ひした。龍馬記念館に、ぼくの絵があるだろうかと思いついたら「受付の横に飾ってある」とのこと。是非行ってみようと思いが、訪れた日が休館日であつたりして、また年月は過ぎてしまった。

今年(2018年)高知へ帰ることがあり、県立文学館の学芸員の女性と記念館を訪れたが、その絵は倉庫にはいつているとのことであつた。淡路島へ戻ったら、龍馬記念館の学芸員から作品のカラー写真が送られてきていた。

どうも高知新聞にエッセイと一緒に掲載された龍馬が走っている絵のようだ。今度は高知新聞にその写真を送って、この絵の出た新聞を捜して下さいとお願いすることになったのだ。

『龍馬生誕150年特集』(1985年11月15日版)にその絵がカラーで大きく出た新聞が届いた。(つづく)

たじま・ゆきひこ(染色家・絵本作家)

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。最新作『そうべえときじむな』が人気。

※『おのころじま』は淡路島の古代のよび名

いろろ がいろ

その二十四

遠い秋

安藝眞一

歳ふる毎に減^へっていくものと、
増えていくものが激しくなる。

減るものは、郵便受けにあつま
る便りと出版物やら雑誌など。年
追うごとに、知人友人がこの世を
去り、盆、暮れも年のはじめも、
季節ごとの便りも絶えて行く。今
どきの季節、年賀状を描き進めて
いる最中に、「……喪中につき新
年のご挨拶を欠礼……云々」のは
がきが到着するたびに、その数に

おどろき、折角仕上げた賀状の山
から物故者あての分を引き出し、
取り出して没にする作業が、わず
らわしくも、切ない思いで続く。
昔は月極めの雑誌も五、六冊は註
文していたので、いつの日もポス
トの中は到来の郵便物ともに、溢
れていた時代もあったのに、この
ごろは朝、夕の新聞と、時々の雑
誌が、一、二冊と無用のDMばか
り。事、足れりと思いつつも、郵
便受けに、すきま風の入る思いが、
何とも淋しくやるせない。

街は情報に溢^{あふ}れているらしく、
賑やかな風情もきこえてくるが、
意味不明の言葉が、テレビの画面
に、新聞紙面に飛びかかって判ら
ないことの連鎖に疲れてくる。イン
ターネットもスマホも当方は関知
せず、Wi・Fiとは何の事か、
SNSとは何のことか？ 近頃の
若い人々からはケラケラと笑いと
ばされるに達しない程に、昨今の
流行り言葉から隔離されている。

身辺、なにやら淋しく、置き去
りの思いを、しっかりと持ちこた
えてくれるのは、遠い日の記憶の
束で、これだけは歳と共に確実に
増えて、しかも次第に明瞭に、時
には、その日の色あひも鮮やか、
その日の音も重ねて聴^{きこ}えてくる。

減る一方の郵便物より、増えて
づける記憶の影が楽しみとなる。
想い出は、四季に分かれて明瞭

に立ち昇るが、春は、別れと出会
いの日々と桜吹雪、いずれもが桜
色に染め上げられた霞ながら、あ
の清少納言の「……春は、あけぼ
の……」の書き出しに、まとめあ
げられて、うつすらと漂っている。
夏はいくつの年も、山と海と川
の水しぶきと風の流れに、太陽が
きらめいていた。昨今の熱帯夜や、
異常高温でもなかった昔は、ただ
ただ太陽がまぶしかった。

想い出の白眉は秋。冬よりも秋
である。繁華街に店を構えた私の
住居は、賑やかな通りにありなが
ら、坪という中庭があり、三棟の
白壁の蔵があった。秋の陽が高知
城に落ちようとすると、夕日が紅
に染め上がり、赤い反射が土蔵の
白壁に花火のように照り、白い漆
喰の肌が赤い息づかいで染め上
がる。と一陣の夕風の中を黒い影が
四方八方から高速で飛び交う蝙蝠
の群れ。ある者は屋根瓦に当たり
ある者は樋に引っかかりして、数
知れない群が夕星のかゝる頃まで
続く。それも毎夕のこと。小学に
入る前から、一年生になって二年
過ぎてても毎日、見あきる事もなく

眺めつづけた。夕陽の赤と白壁と
黒い蝙蝠の羽音。夢のような眺め
も高知大空襲で灰になった。

蝙蝠が消えた。中学生になって
龍河洞にもぐり込んだ時に洞穴の
奥で蝙蝠を見つけたが、その面が
まえば、ただ／＼恐ろしいばかり
で、それからは蝙蝠のことは忘れ
て、いく年の秋も過ぎた。

それから四十年程、過ぎた年に
アルハンブラに近いグラナダの町
の夕暮れ。異様な鳴き声に見上げ
る夕焼けの空に蝙蝠の大群が群
がって飛んでいく。空は燃え上
がる様な紅色で蝙蝠の群れは泳ぐよ
うに急旋回で駆けめぐっている。
風もなく、まだ星もなく燃え続
ける夕焼けに、私は緋色に染まっ
て、群れを眺めつづけていた。

了

四国グラフィックコミュニケーションズ工業組合 50周年記念式典

2018年11月10日(土)
於 ザ クラウンパレス新阪急高知



四国グラフィックコミュニケーションズ工業組合(前四国写真製版工業組合)の50周年記念式典が、開催されました。

前社長が理事長を務め、私も現在副理事長の役を頂いています。

全国からご参列下さった皆様からお祝辞を頂き、式典、講演会、祝賀会と盛会裡に

催すことができました。

記念誌作成のため、資料や写真を集め、組合の足跡をたどりながら、この組合の為に業界の変革に立ち向かい、大変な努力をして繋いで下さった先立の方々に改めて感謝と敬意を表したことでした。

(永野雅子)



土佐寿司の本出版祝賀会 & イベント

祝賀会 2018年11月5日(月)
於 城西館

イベント 2018年11月11日(日)
於 金高堂本店前



小春日和の佳き日、高知県主催の「土佐寿司の本出版記念祝賀会」が催されました。

参加された皆様は、土佐のお寿司の数々や郷土料理、伝統料理に加え、松崎先生手作りの「さば寿司」に大喜び、土佐のおきやく文化を楽しみました。

尾崎知事から「高知の食文化のために、第2巻、第3巻の出版もよろしくお願いします」とのご祝辞に、先生はユーモアいっぱいのご挨拶で応えられました。

当日、各書店で販売が始まると県下各地の本屋さんから次々に注文が入り、我が社は対応に大忙し。

11日(日)には金高堂書店前でイベント。たくさんの方が声をかけてくださり、ご購入いただきました。

なんとそれから、3週続けて金高堂書店売り上げNO.1になったのです。

先生に報告すると、あの笑顔で「まあーっ」、御年92歳のお顔が輝いていました。





「第7回 ものづくり総合技術展」に出展

2018年11月15日～17日
於 高知ちばさんセンター

「ものづくり総合技術展」に出展させていただきました。

3回目の出展となる今回、展示内容は「ホームページ編集システム A-TOOL (エイツール)」と「動く印刷 拡張現実～AR～」でしたが、今回は来場者も多く沢山の方に弊社ブースに足を運んでいただき“高知の印刷会社でもこんなデジタル事業を行っている”ということをアピールできたこと、また見学に来ていた小学生や中・高校生に「こんな取り組みをしている地元企業がある」という認識を持ってもらえたことは、高知の企業として良い種

蒔きになったのではないかと思います。

さらに、実際にブース内でホームページ編集システムの A-TOOL を体験してもらい「これは凄い!」「凄く使いやすい!」と即ご採用いただいた企業様や、前向きに検討いただける企業様と巡り会えたことに大きな喜びを感じております。

今まで関わりが少なかった飛鳥社員にも交代で参加してもらったことで、社員教育の一環にも繋がり、いい事だらけであった今回でしたが、ぜひ来年も出展し多くの学生や企業の皆さんに『飛鳥の仕事』に触れていただければと考えております。

(永野正将)



BBQ大会



10月20日(土) 飛鳥駐車場にてBBQ大会が行われました。10月下旬だということにとても暑く、汗だくになりながら大量のお肉と鮭やイカ、貝などの海鮮を焼くことに…。いつの間にか焼く担当と食べる担当に分かれてしまい(私は終始食べる担当でした。焼いてくださった方々ありがとうございました。)最終的には林さんと林さんの奥様が二人で仲良く焼いていました。

従業員だけでなく家族も参加可ということで、私の夫と子供も参加させてもらいましたが、子供はいろんな方に相手をしてもらい、夫はお酒とお肉を堪能し、二人とも楽しんでいました。

飛鳥でのBBQ大会は初めてでしたが、美味しいお肉にみなさん大満足のようでした。みなさん暑い中お疲れ様でした。来年はもう少し涼しい日にやりたいですね。(柴田真弓)

わが家の太郎

44

老い



9月のある日、太郎の元気がないなと思いつながら様子を見ていると、夜になって呼吸をしているかと心配になるほどぐったり動けなくなった。

2日ほど食事もなく受け付けず、いつもとは明らかに違う。

さすがに心配で居間に入れ、太郎の横で寝ることにする。

あくる日、病院に連れて行くと、「眼圧がかなり高くなっています。右目は白内障、左目が急性緑内障ですね。視力の回復は無理でしょう」とのこと。

つまり、両目とも失明というわけ。思いもしない事態に呆然。

薬をもらって、これからどうしよう、暗澹たる気持ちで家に帰る。

先生もあれこれ治療の方法を探ってください、とりあえず毎日通院。目薬は病院ではさせるけれど、私が挿そうとすると暴れる。結局、「無理にすると、恐怖を抱かせるので却って良くないでしょう」と、中止。

家族も皆心配してくれるが、今更どうしようもないわけで、事態を受け入れつつ、太郎を日々の暮らしに順応させるしかない。

突然目が見えなくなった太郎は、あちこちぶつかりながら、それでも少しずつ元気になってきた。でも、薬だけは飲ませないといけなので、まるで太郎との攻防戦。好きな缶詰肉に混ぜてやっても、上手にその部分だけ残す。

ある時は、スナックのおやつに切れ目を入れて薬を差し込み、カリカリと混ぜて出すと、周囲のカリカリだけ食べてある。ならばと、薬入りスナックだけにして置くと、

永野 雅子

2日間一切食べない。結局こちらが根負けして、お好きな食事をどうぞの始末。

出先でその話をする、「カプセルに入れたら匂いもしないから食べますよ」と聞いて、早速小さなカプセルの口に粉薬をやっと入れて、おから料理の中に埋め込んだ。

昨日から食事をしてないから多分食べるはずと、期待して差し出す。

しばらくして太郎の皿を覗くと、何と皿の底にカプセルだけがきれいに残っているではないか。あんまりやない！あれこれ氣遣っているだけによけい頭にくる。

先生が、

「柴犬は痴呆がかかると、頑固になる氣質があります」と言われたけれど、散歩中も私の誘導がないと歩けないのに、突然方向を変えようとするので、

「太郎、こっちょ」とリードを引っ



早朝から大きな声も出せず、動かない太郎の鼻先におやつを近づけてはやつとの思いで帰る日もあった。

そんな毎日でも相棒であることには変わりなく、頂いたお守りを首にかけた太郎の足取りに合わせ、て散歩していると、出会ったおじいさんから

「この犬は柴かね。えらい（ひどい意味）よばよばじゃが。ようよう歩きゆう」と声をかけられた。放つといってもらいましょうか。お互いさまよ、おじいさん！ものは言いようでしょう。失礼な！

ながの・まさこ／飛鳥常務取締役